

白鳥の湖、白鳥の歌

この夏のイングリッシュ・ナショナル・バレエの『白鳥の湖』は、退任する前芸術監督へのオマージュともいえるすばらしい舞台でした。マギー・フォイヤーがお伝えます。

オリンピックが開幕し、ほとんどのバレエ団が夏休みに入る中、イングリッシュ・ナショナル・バレエ(ENB)がロンドン・コロシウムでデレク・ディーン版『白鳥の湖』を上演し、シーズン末にありがちな“疲労の色のにじむ”舞台とは別次元の最高の踊りを披露した。”白“の幕では、美しいポジションへと伸ばされた脚と繊細な腕を持った一糸乱れぬ群舞の列また列が印象的で、それと対をなすような超絶技巧とドラマが宮廷の場面を彩った。

当初初日に主演予定だったのはダリア・クリメントヴァとワディム・ムンタギロフだったが、後者がビザの問題でロシアからの出国が遅れ、高橋絵里奈とズデニェク・コンヴァリーナがその榮譽を担った。二人のパートナーシップは場面が進むにつれて向上し、最終幕では情熱の炎を立ち上らせた。高橋は抑圧に怯えるオデットだったが、最初のデュエットでのコンヴァリーナの穏やかな接し方に、いつとき心を溶かす。続くヴァリエーションでは振付のあらゆるニュアンスを繊細に表現し、内なる思いの高まりを確かに描いて、白鳥の傷つきやすさをさらに際立たせる。この日が初の王子役だったコンヴァリーナは、端正でクラシカルなライン、上に立つ者の存在感、そして青臭い理想主義と、あらゆる面で申し分ない貴公子。第三幕では希望と欲望をたぎらせ、高橋はその彼を嬉々として騙す冷血の誘惑者に変身する。両者の演技はみごとにかみ合い、フレージングは意味深長な調和を見せ、音楽のアクセントと力強い推進力を捉える。そのアダージョには技術の粋をつくしたそれぞれのソロが続き、大きく盛り上がった。

また他日には、アナイス・シャレンダールとフノール・ソウザが魔法のようなパートナーシップを作り上げた。鍛え上げた身体による究極の美のフォルムを要求されるのが、「白鳥の湖」というバレエだが、絶妙な脚線と白鳥を思わせる首を持つシャレンダールは、“すべての項目に丸のつく”すぐれた仕上がりがだった。期待のソリストだったソウザも、ダンスール・ノーブルの呼称にふさわしい成熟ぶり。彼の王子は鬱々とした運命論に支配されており、登場場面での自信に満ちた様子や友人たちとのくつろいだり取りにも関わらず、自らの運命をすでに察している。第一幕最後のソロで、その真情が最も雄弁に表現された。湖畔での二人の出会いは、すでに敷かれた宿命の愛への一本道であり、悲劇が逃れようもないものであるだけに、なおさら胸を抉る美しさがある。第三幕はそれと鮮やかな対比をなし、彼女はドラマの才を余すところなく発揮して王子を誘惑する。また彼も、心の底に兆していた逡巡を振り棄てて、情熱的に彼女を受け入れる。回転一つとっても、劇的な表現力が高度なテクニックを引き立てているところがあり、クライマックスのさらなる高揚感へと繋がった。



『白鳥の湖』での、フノール・ソウザとアナイス・シャレンダール
Photo: Emma Kauldhar/Dance Europe

ロートバルトは、ジェイムズ・スティラーとファビアン・ライマイルがそれぞれの出演日に好演、場の雰囲気や人々の感情を操り、不吉な方向へと手繰ってゆく第三幕は、特にすぐれていた。この演出の誕生の場であるロイヤル・アルバート・ホールの巨大な円形舞台に比べ、コロシアムの舞台は小さい。怪しく光る翼の動きに制約が生じたのは確かだが、重々しく両翼を振り上げ湖畔に嵐を巻き起こす場面の迫力はすばらしい。幕切れの王子との対決の場面の振付が、説得力十分とは言えないレベルだったのだけが惜しまれる。

ディーンの演出は、伝統的な版を核にいくつかの魅力的な趣向を加えたもので、第一幕のワルツとポロネーズは、高度な振付をトップクラスのキャストが踊った。フレデリック・アシュトン振付のパド・カトルでは、ローレッタ・サマースケールズと加瀬葉という二人の個性的な女性ソリストが、それぞれのソロに独自の解釈を盛り込んで踊り、男性はヴィクトールとギルヘルムのメネゼス兄弟が息のあったデュエットを見せた。舞踏会の美術は豪華で、ピーター・ファーナーのデザインによる各国のお国柄を表現した衣裳のダンサーたちが、大広間に放たれたように熱気のコもった踊りである。中でも赤星慶とファン・ロドリゲスによるナポリの踊りは、テンポの速い曲に載せて加速度的な高まりを見せた。また六人の花嫁候補は魅力的で、この状況設定でなければ、王子は誰を選ぶか悩んだことだろう。

監督のウェイン・イーグリングと芸術補佐のメイナ・ギールグッドは共にシーズン末で退任したが、ENBはこの二人のもので創造性と芸術性を高め、ダンサーたちは才能を開花させた。この『白鳥の湖』はその成果を見事に示す機会だったが、同時にこれが“白鳥の歌”でもあったのは、いかにも残念なことである。(訳:長野由紀)